特集論文

COVID-19のパンデミックとブリーフサイコセラピー〜変わるもの、変わらないもの、役に立ったこと

　特集論文担当編集委員　市橋香代　長沼葉月

趣旨：

新型コロナウィルスCOVID-19のパンデミックにより、私たちはかつてない世界的な感染症の脅威を経験しています。2020年の東京オリンピックの開催を信じて疑わなかった頃が随分前のことに思えます。クラスター、ソーシャル・ディスタンス、ステイ・ホーム、「新しい生活様式」などの耳慣れない言葉が一気に日常に流れ込んできました。緊急事態宣言は解除されましたが、今後の先行きは不透明で、ウィルスと「共にある」生活へのシフトが模索されています。そんな不確実性の中、家庭内の不和や暴力、「自粛警察」などの行き過ぎたバッシングなど様々な問題が生じています。社会や組織に以前からあったものが顕在化したようにも見えます。一方で、変わらぬ営みもあります。公園で手をつないで散歩する家族があり、飲食店には客足が戻ってきました。大きな変化と変わらぬ営みの中で、ブリーフサイコセラピーはどのように形を変えたり、変わらなかったりするのでしょうか。

今回の特集では、ブリーフならではの切り口で、一連の経緯の中で気づいた誰か（クライエントやセラピスト、組織の同僚、など）の強みやレジリエンス（困難があったからこそ発揮される回復力）を集めたいと考えています。With COVID-19で生まれた新しい実践（ビニール越しやオンラインの面接）、医療従事者の惨事ストレスや差別への対応、在宅勤務の可能性、自粛ストレスのないひきこもり、オンライン授業やワークショップを行う工夫など、様々な領域でブリーフサイコセラピーが生きた経験を共有いただけませんか。もしかすると遠い昔の経験が生きた、ということもあるかもしれません。

ブリーフサイコセラピーに関しては方法論的に運用されたものでも認識論的なものでも構いません。学会員の実践報告の場となればと思っています。もちろん調査研究も大歓迎です。

倫理的配慮

本学会のガイドラインに基づき、研究対象者の同意取得をお願いいたします。事例報告の際には守秘義務に配慮しながら論文で公表する予定であることを明示して、同意撤回の方法（期限や方法など）と共にご説明ください。可能であれば文書での同意取得が望ましいですが、困難な場合には、日時、説明者、説明対象者、説明内容を記録に残し、問い合わせがあった場合に開示可能となるようにしてください。

注意点

エッセイではなく論文ですので、何らかの今までにない独自の切り口からの考察を加えて下さい。その点を踏まえて①タイトル②氏名・所属③概要（800字以内）を記載した企画書を担当までメールで応募してください。企画書をもとに編集委員会で検討の上、まずは企画の採用を決めさせていただきます。なお、企画の採用が決まって執筆していただいたとしても、査読を経てからの採択となりますことをあらかじめご了承ください。また、ご執筆いただく場合の字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙に換算して40枚）以内となります。

特集論文企画書締切日：2020年7月31日

提出先：[hensyuu@jabp.jp](mailto:hensyuu@jabp.jp)　担当：市橋香代　長沼葉月

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

JABP特集論文企画書

※メール送信の際には、件名の頭に必ず【JABP特集論文】と入れてください

1. タイトル
2. 氏名・所属
3. 概要（800字）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

公募開始　2020年6月30日

企画書募集締切　2020年7月31日

論文投稿締切　　2020年10月31日

※その後査読等を経て、順調にいけばブリーフサイコセラピー研究第29巻2号に掲載予定です。